

真実を見つめて

松田幸子

はじめに

真実を見つめることは難しいものである。とくにそれが自分自身に関わりをもつ場合、人は自分にできるだけ都合のよいように解釈しがちである。しかし真実をありのまま見つめ、運命に翻弄され挫折や悲劇的結末におちいった例も少なくない。例えば望遠鏡を発明して天体観測をし、地動説を支持して宗教裁判にかけられたイタリアのガリレオなどはこのような悲劇の人である。

今回とりあげるのは物語の世界の話である。ドイツの哲学者ヤスパース (Karl Jaspers, 1883 ~ 1969) は、著書『真理について』の中でソフォクレス (Sophokles, 前 496 ~ 406) 作のギリシア悲劇『オイディプス』とシェイクスピア (William Shakespeare, 1564 ~ 1616) の『ハムレット』をとりあげ、オイディプスとハムレットの真実追求の姿勢が真理探求の態度と合致していると評価した。

ヤスパースのこの本は 1054 ページもの分厚いものであり、この日本語訳は 5 冊に分割されて理想社から出版されている。そのなかの 1 冊を恩師 (故) 小倉志祥先生 (東大名誉教授) と私とが共同で翻訳した。私たちが翻訳したところに『オイディプス』と『ハムレット』がでてくるので、ここではその翻訳書を主として参考にし、オイディプスとハムレットの真実追求の様子を眺め、ヤスパースの評価などを紹介しながら悲劇について考えてみたいと思っている。

第1章 ソポクレスのギリシア悲劇『オイディプス王』

1・1 物語の概略

オイディプスはテーベの王子として生まれたが、父を殺して母と結ばれるだろうという恐ろしい運命が予言されたので、父親の王は家来にこの子を殺すことを命じた。しかしその家来は殺すに忍びず森の奥に捨てたため、この子は拾われて隣国で成長した。ある時、予言された自分の運命を知ったオイディプスは、そのような恐ろしい事態が起きるのをさけるため、父（実は養父）のもとを去って旅に出た。たまたま旅の途中で出会った人々と争いになり一人を残して殺してしまったが、その殺した人のなかに彼の実の父親がいたのである。そのことを知らないままにオイディプスは怪物に悩まされていたテーベにやってきて、怪物を退治し、テーベを苦難から解放した。そして約束に従って国王となり前王の妻（実は自分の本当の母）を妃にし、二男、二女をもうけ、善政をしいて人々からは名君として尊敬されていた。やがてこの国に悪疫が流行し、その原因を追求したところ、前王を殺したものが国内にいるからであるということがわかった。犯人を探して国外に追放しなければならないという神託を受けたオイディプスは、その犯人探しの過程で、旅の途中で自分が殺した人のなかに前王がいたらしいということを薄々と知るようになった。オイディプスはあまりの恐ろしい事実死にたいとさえ思ったが、それが本当に事実であるということが明確にわかるまで、あらゆる方法を取り、真実を誠実に勇敢に見極めようとしたのである。その事実を察知した妃は、実の息子と結婚していたことを恥じて自害してしまった。

オイディプスは全容が明らかになった時点で、今まで真実を見る力がなかったのであるから、今後は闇を見るしかないと言って自分の眼を自分でくり抜いたのである。

1・2 物語の哲学的考察

ヤスパースは、オイディプスが何かのためではなく、ただ知りたいとい

う欲求のためだけで行動し、そのことによって苦しみ挫折したことに一つの価値を認めている。ヤスパースは具体的に、オイディプスのどのような行動についてそのような価値を見いだしたのであろうか。ここではそのことを検証してみたい。

オイディプスは盲目の予言者から、前王の殺害者がまだ国内にいるので、現在テーベに流行している悪疫は治まらない、悪疫をなくすにはその犯人を国外に追放しなければならないという神託を聞いた。これを聞いたときにはオイディプスは、この事件が自分と関係があるとは思っていなかった。しかしその予言者は、この事件がオイディプスと関係があることを知っていて、次のように言った。

「おお！ 賢いとは何と恐ろしいことか、賢いことがいかなる報酬をも賢者にもたらさない時には！

あなたがたは皆なんと愚かな者よ、私は何一つもあばきはせぬ、私があなたの破滅をあばかなくて済むためである・・・」

このような思わせぶりのことを述べる予言者を、オイディプスは脅迫したり侮辱したりして次の言葉を聞きだした。

「国の神聖を犯した人はあなたご自身ですぞ」

この言葉にオイディプスは狼狽するが、彼は信用するにはあたらなひ奸智に長けた言葉であると考え、さらに予言者を嘲弄してその言葉を信用しようとはしなかった。しかし極度に脅迫された予言者は、問答の形でさらに恐ろしい真実を暗示するのである。

「あなたは私を盲目と嘲笑するならば、私も申し上げます。あなたは眼がお見えになる、それなのにあなたがひどく墮落なさっているか、

眼の前にしておりながらお見えにならぬ・・・

あなたご自身はどなたの血をひいておいでかご存知か？」

そこでオイディプスは取り調べを始め、まず妃を問い詰めて事態が明らかになり始めたのである。妃のイオカステ（前王の妃でオイディプスの実母）はそれにたいして次のように答えはじめた。

「あるときライオス殿（前王）に神託がございました・・・

それは私とあの方とのあいだに生まれた子供の手にかかってあの方がお果てになる運命にあるとのこと。ところがあの方は噂でございますが、ある日、三筋の道の会うている場所ですよその国の盗賊どもに殺されました。子供のほうは生まれてから三日とたたないうちにライオス殿がその両足のくるぶしを一緒に留め金で刺し貫き、ほかの者の手に託して道なき山中に捨てさせたのでございます・・・」

それ故この子供が父殺しが出来るはずはないと妃イオカステは述べるのであったが、オイディプスは逆に其の言葉から、激しく心がかき乱されたのである。なぜなら彼はこの話に思い当ることがあったからである。この時点でオイディプスは、事の真実を知りかけたのである。普通ならば、恐ろしい真実が明らかになる前にその真実探求を中止するであろうと考えられるが、オイディプスはその凶事の起ったのはどこで、何時頃のことか、ライオス王の背丈はどのくらいであったか、家来の数は何人であったか、さらにその事件をお城に伝えたのはだれであったかなどを詳しく問いつめたのである。

ここまでの説明でオイディプスは、この王の殺害には自分が深く関係しているらしいということを感じた。しかしさらに真実を明確にしたいと考えたオイディプスは、ライオス王の家来で一人だけ逃げ帰った者を呼び出して真実を語らせたのである。

すっかり真実を知ったオイディプスは、自分の犯した恐ろしいことにた

じろぎ、人々の前から身を隠してしまいたいと思った。彼の気持ちを知った妃は、かれに次のような言葉をかけた。

「偶然によって支配されており、
確実な洞察によって何一つとして予感的に
わからない人間が、
何を恐れることがありますか？・・・
母との結婚などを恐れることはございません・・・
何しろ大勢の人がもう以前に夢の中で
母親と枕を交わしていますものを・・・
この詮索をお止めくださいませ」

しかしオイディプスはこれにたいして次のように反論した。

「包み隠さずにそれを見なければならぬのじゃ」

自分の納得のいく方法で、事件の全体を明らかにしなければならないと彼は考えたのである。そして自分の意志によってこの恐ろしい事実が明らかになったとき、オイディプスはすでに自害していた妃の衣装から黄金の留め金はずして自分の眼球をくり抜き

「私の不幸、私の悪業を見るのもこれが最後だ。見てはならないものを見て、私が知りたいと願っていた人（実の父親）を見分けることができなかつたお前ら（両眼）は、今後は暗闇のうちにあるであろう」

と言った。さらに彼は歎いた。

「この眼をえぐったのは誰でもない、不幸な私の手だ。どうして目明

きである必要があるか。眼が見えたとしても何ひとつ楽しいものが見えぬ私には」

以上のことをふまえてこの悲劇を哲学的に考えてみたい。

オイディプスはこの事件の真相を最後まで追求したが、実は途中で追求を止めてもよかったのである。しかも追求を止める機会は二回あったと思われる。

その第一回目は「国の神聖を犯した人はあなたご自身ですぞ」という予言者の言葉に彼が狼狽したときである。なぜ彼はそのとき追求をやめなかったのであろうか。それは予言者の言葉をそのまま信じるより、自分の知の力を信じたいという思いのほうが強かったからであろうと考えられる。それはテーベの地に足を踏み入れ怪物を自分の知恵の力で退治したという自負がオイディプスにはあったからである。

第二回目は妃イオカステを取り調べ、自分がテーベの捨てられた王子であり、実母を妃としていることを自覚し、激しく心がかき乱されたときであった。しかし妃の言葉だけでは真実かどうかかわからず、前王の家来で一人だけ逃げ帰った者の証言を聞く前に追求を中止することも出来たはずであった。

しかしこれでは自分自身を納得させることができず、オイディプスにはすべての覆いをはぎとって真実を明確にしたいという強い欲求があったからであろうと考えられる。

ここで私はハイデガーの「真理というものの本来は、おおわれているもののおおいをとり除くことだ」という言葉を思いだしたのである。この言葉はハイデガーが強く主張する彼の真理観である。

ヤスパースは、真実を知るためにおおいをとり除くのは、自分の知の力であり、そうすることのなかに人間の誠実さがあると認め、オイディプスの行為を讃えたのであると思われる。そしてヤスパースはオイディプスに次の言葉を捧げたのである。

「知と運命によって不幸なオイディプスに、神の意志によって一つの新しい価値が結合する。オイディプスの遺骸は、彼が安らう国土に祝福をもたらす」

第2章 シェイクスピアの『ハムレット』

2・1 物語の概略

デンマークの王が弟クローディアスに毒殺され、クローディアス自らが王位に就き、殺された王の妃と結婚した。その後、甲冑に身をかためた王の亡霊が夜毎に城壁に現われるようになった。このことを知った息子ハムレットはある夜、これを見とどけるために城壁に登っていった。すると父の亡霊が現われ、クローディアスに殺されたということを息子に語った。これを聞いたのはハムレットただ一人であり、これを証明する証人は誰もいなかった。犯罪の事実を知る人は殺人者クローディアスただ一人である。前王の亡霊が真相を語っているとはいっても、亡霊であるために絶対に正当な証人になることはできない。しかもそれを裏づけする証拠もないのである。しかも当時のデンマークはクローディアスのもとで表面上、政治の面では安定していたので、亡霊が語った事件を話したとしても、それを信用する人は誰もいないであろうと思われた。

物語のなかでのハムレットの役割は、叔父クローディアスの犯罪の事実を明確に知ったうえで、父の復讐をすること、そしてクローディアスの悪事をデンマークの人々に正しく知らせるという二つのことであった。

2・2 物語の哲学的考察

ヤスパースがハムレットを高く評価している理由は、オイディプスの場合と同様に真実を追求し、能動的にたえず努力するが、人間知の限界を知って苦悩する点にある。

誰も知らないことをただ一人知り、復讐をしようと決心したハムレットは、世の中に適応して生きることができなかった。そこで彼は狂人のふり

をし、親友以外の周囲の人々や恋人に心の中で別れを告げ、真実を探求する行動にでたのである。そのような狂人のふりをしたハムレットにむかって恋人オフィーリアは次のように言った。

「おお神よ、あの方をお救いくださいませ」

これにたいしてハムレットは答えた。

「どうしても私と結婚するというのなら、持参金のかわりにこの呪いをくれてやろう——たとえ氷のように貞潔であっても、雪のように純潔であっても、世間の謗りはまぬがれないとな。尼寺にゆけ、さあ、ゆけ・・・ゆけ、尼寺に、今、すぐにだ」

この言葉でオフィーリアも狂って川に落ちて死んでしまったが、ハムレットはさらに狂人のふりを続けるのである。

ハムレットが狂人の仮面をかぶることは、真実を知るための手段としては必然的なことであったとヤスパースは考えている。真実が隠されている偽りの世で、誰も知らない真実を知ったただ一人の例外者が、誠実な人間として生きようとすれば、狂気の仮面で身を隠すのが最上の手段となるからである。またハムレットが、多くの批評家から優柔不断であり、夢想家で非行動的と批判されてきたことにたいしてもヤスパースは次のように弁護した。

「ハムレットがそのように見えるのは、真実追求への限らない意欲を自らの本質としてもっているからである」

ハムレットは叔父クローディアスの犯罪を父の亡霊から告げられて知ったが、確実に事実を知っているわけではない。ちょうどその頃に城を訪れた旅役者たちに、ハムレットは国王クローディアスの前で芝居をさせることを思いついた。その芝居の内容は、クローディアスがハムレットの父、すなわち前王を殺害したことを暗示する次のような一幕もあった。

《舞台の上ではハムレットの父の役を演じる役者が一人眠っている。
その時、クローディアスに扮した役者が眠っている王の耳のなかに
毒を入れる》

観劇していた王クローディアスの様子を見つめていたハムレットは、今まで疑心暗鬼であったクローディアスの行なった犯罪に確信をもったのである。クローディアスもまたハムレットが自分を殺そうとしていることを察したのである。その頃、ハムレットにつれなくされ、その悲しみのため気が狂って死んでしまった恋人の兄が剣の腕を磨いて外国から帰ってきた。

クローディアスはその兄とハムレットを剣で試合をさせ、それに乗じてハムレットを殺そうと企てたのである。そのために兄の剣先には毒を塗っておき、またハムレットが試合の途中で飲むであろうと予想される酒の杯には毒を入れておいた。二人の乱闘の間にハムレットは傷を負い、また乱闘中にハムレットは毒の塗ってある相手の剣をうばいとり、それで相手に傷を負わせた。相手が死んだことを知ったハムレットは剣に毒が塗られていたことを知り、その剣で叔父クローディアスを刺し殺してしまう。その間に王妃（ハムレットの母親）は誤って毒の入っている杯の酒を飲んで死んでしまった。

ハムレットは死の直前、親友に二つのことを依頼した。その第一は、このたびの事件の真相を広くデンマークの人々に知らせること、第二には、次のデンマーク国王にはフィンランドの王子を迎えるようにということであった。そしてハムレットは「あとは沈黙だ」と言って死んでしまう。

彼のこの態度には、人事を尽くして天命を待つという心境が見られ、そこには人間の思慮をこえた深遠なものに、すなわち超越者に身を託した安らぎがある、とヤスパースはみるのである。

さらに私が付け加えたいのは、アリストテレスがいう真の勇気をみてとるのである。すなわちアリストテレスの勇気という徳は、知的な思慮を必要とするのである。無謀な態度や暴勇的な態度、捨て鉢な態度、異状に大

胆なことをする態度をおさえ、決断をくだして行動にでるという態度である。言うならば勇氣とは、知的な思慮のうえたった思いきりのよさである。それは激情に知的思慮を加え、その中庸をとったものことである。そのようなアリストテレスの意味する勇氣が、ハムレットには見られると私は考えている。

第3章 悲劇についてのヤスパースの考え方

ヤスパースの言う悲劇性とは、人間の日常生活のなかで物事がうまく行っている時に突然起る挫折とか、自分を挫折させたものにたいする激しい怒り、また挫折による絶望感から生まれてくる超越者の存在を感知するといったようなものが渾然一体となったものである。それ故、ヤスパースによれば、哲学的なものを含む悲劇的なものの見方とは、人間の逃れられない運命、苦悩、災厄、はかなさなどを無条件に直視し、正しく認識する働きである。すなわちオイディプスが「覆いをとってこの眼で見なければならぬ」と言ったあの誠実さを持った勇敢さであり、ハムレットが優柔不断とみられるほどの慎重さをもって真実追求を押しすすめる態度である。それはまた、悲劇的な破滅というものの真相をどこまでも追求するが、最終的には人間の知恵ではその根柢を突きとめることができずに挫折に追い込まれてしまうという態度である。そしてその挫折のときに超越者の存在を直感するような態度である。最後にハムレットが「後は沈黙だ」と言ったとき、彼は超越者の存在を認める心境に達していたのである。したがって次のようなものには悲劇性は認められないのである。

その第一は、自然の季節ごとの変化を死と生の復活の現われと受け取る場合には悲劇性はない。たとえそれが死であっても、そのような現象を人は心やすらかに直視することができるからである。

第二には、前と同じように人間の生涯が時間的に見れば無常であり、榮枯盛衰があるとみる意識のなかには悲劇性は見られない。なぜならば、人は生まれては滅び、滅びてはまた生まれるという永遠の循環のなかに生き

ているからである。このようなものも、人は心おだやかに見つめることができる。

第三には、宗教的な考えのなかにも悲劇性はみられない。たとえばキリスト教では「救われる」という言葉がしばしばつかわれるが、そこには悲劇性は認められない。キリスト教では原罪は、アダムの墮罪によるものであり、そこから抜け出して救われることは、私たちの罪をあがなうために十字架にかけられたイエスの死から生まれるものである。したがってキリスト教的信仰から見ると、世界がどのように不幸で悲劇的な様相をしめしていたとしても、その世界は人の魂の永遠の救済をうるための試練の場所と考えられるので、そこからは本来的に悲劇的なものは生まれてこないのである。

おわりに

今まで『オイディプス』と『ハムレット』についてその真実追求の態度を眺め、それにたいするヤスパースの考えを述べてきた。

ヤスパースは『オイディプス』と『ハムレット』をともに悲劇として評価しているが、両者は同一の次元の悲劇とは少し異なるように思われる。

オイディプスの真実追求は、実の父親殺しが本当に自分であったかどうかを慎重に調査し、事実が明確になった時点で自分の両眼を自分でえぐってしまうという悲劇である。

それにたいしてハムレットは、父親の亡霊から父殺しの真相をきかされ、それが事実かどうかを慎重に追求したのである。そしてそれが真実であると判明すると、復讐を実行することによって自分も破滅したという悲劇である。

この二つの悲劇を殺人事件として見た場合、オイディプスは自分が犯人でなければよいという願望のもとに、いわば受動的な態度であったのにたいし、ハムレットは、ことの真相を知ると狂気を装って能動的に叔父殺しを企てたのである。

ここにこの二つの悲劇のある意味では本質的な差があるが、ヤスパースのいう悲劇性では同じかもしれない。

『ハムレット』の翻訳者野島秀勝が岩波文庫版（2002年）の解説で述べているように、『ハムレット』は父を殺した叔父にたいする復讐劇であり、狂気の仮面は復讐を成功させるための仮装である。

野島は解説のなかで「忠臣蔵」を引き合いにだしてハムレットの狂気を説明し、復讐劇においては敵や味方に自分の目的を知られないようにするために狂気を装うことが一般的だと言っている。私もこの意見には同感である。オイディプスこそが真の悲劇の人であり、ハムレットの悲劇にはこれとは少し違うところがあるように思われる。ハムレットの場合には、自分の意志で復讐をしようとしているところがあるからである。しかしながら、オイディプスもハムレットも、真実を見つめようとした態度には変わりがないと考えてよいであろう。

真実を見つめ、そこで知ったことを主張するということは、人々にとって時には大きな勇気を必要とするものである。

参考文献

1. Karl Jaspers 『Von der Wahrheit』 1947。
2. ヤスパース『真理について』小倉志祥・松田幸子訳、理想社、1985年。
3. ソポクレス『オイディプス王』高津春繁訳、ギリシア悲劇全集・第二巻、人文書院、1967年。
4. シェイクスピア『ハムレット』野島秀勝訳、岩波文庫、2002年。
5. 小倉志祥『道徳の諸相——徳論の展開』長野県道徳教育学会、1989年。